

作業服と歌 歌って戦う職場

秋山日出夫

「音楽の友」昭和18年8月号

連日の報道に依って、南海決戦の愈々熾烈を加え連戦連敗莫大なる損失にも拘らず、次から次へ続々と頼む豊富なる物資に物を言わせて、我が鉄壁の布陣に対して敵国の挑戦は軽視を許さざるものが有る。皇軍必死の賜である戦果を喜ぶのは良い、然し決して酔ってはならない。敵国の莫大なる損失の反面には、必ず吾々心に銘すべき幾多の尊い犠牲のある事に思いをいたす可きである。

今日前線と銃後との区別は無い。勝ち抜く為に日夜の別無い血みどろな奮闘を続けている生産陣各工場は、既に第一線陣地と何等変わる事の無い、命をかけての決戦を行っている。日本の兵士は強い。何十倍もの敵を向こうに廻して決して打ち負ける事は無い。然しこれら忠勇なる兵士に充分なる装備あってこそ、鬼に金棒という事が出来るのであって、金棒の無い鬼であってはならない。一つ失えば五つを加え五つ失えば百の補充をいたすこそ、我等が生産陣の責務であるとする。生産戦士の責任こそ実に重大である。この重大責任を持つ生産陣と歌に就いていささか述べて見度いと思う。

此の決戦下職場に歌でもなかり。此の考えはもう古い。どの職場も職場も今日では盛んに歌いまくっている。そんなものかという人があったら、論議は抜きにして一度やって御覧なさい。歌う工場の一時を見学して御覧なさいと申上げる。僅かな暇をさいて、油のまま埃のままの作業服で歌いまくる職場の歌には、社長も工場長も見習工も男女の区別が無い。全職場一丸となって歌い合すのである。こんな人がと思われる老人さえも交じって、自分の孫の様な少年工と一緒に、目を輝かせ手を振り足取りをしつつ歌っている姿を見出す時、実に頼もしく思う。皆が一樣に若返っている。元気に朗らかに日頃の疲労も何のその、歌声によって吹き飛ばすのである。陣頭指揮とやかましく言われているが、歌い合わせる職場の一時こそ理屈抜きの一心一体身分の上下が無い。

吾社の社長さんは何と言う銅鑼声なんだろう。吾工場の工場長は見かけによらぬ可愛い声で歌う等と、見習いの少年が給仕の女の子が心から愉快的笑い話もする。この様な情景は再三見る所であるが、こんな工場こそ第一線の生産工場として、必ず立派なお役を立てている工場であり、事実他の模範工場であると聞いている。

その工場の歌声によって、其の盛り上がる気力の如何が生産能率の尺度計の様に感じられてならない。

和やかな朗らかな歌声こそ、勝抜く生産陣の疲労に活を入れる一時である。以上考えをいたしてみるとき、喜ぶからどんな歌曲でもいいだろう。こういう考えを持っている歌い手指導者が未だ多くある。考え直して戴き度い。昔流行した軽弱な流行歌詞ジャズ調の歌は歌えば必ず喜ぶには相違ない。然し其の喜び方、喜ぶ心境を考えて欲しいと思う。決戦下産業陣営にこれらの歌は一切無用であり、排撃すべき事は言を俟たないのである。

同じ喜んで歌うにも感激性が望ましい。そこに何等かの指導さるべき精神が欲しい。共栄圏指導者としての誇りも感じられて、心からなる喜びとなるものであって欲しい。

此の意味に於いて工場での歌が単なる慰安娯楽であってはならない。感激に燃えて心から明日への活力を奮い起こすに役立たせてこそ、真の歌声であるべきである。

午前中の疲れにぐったりした昼の休み、私は再三出かけて行って歌唱の指導をする。疲れているはずの工員諸氏が、別人の様に元気で歌う調子に乗ってつい規則時間を10分15分と食い込む事が有る。大切な工場の寸秒である工場長係長の方々から、此の10分15分は午後の仕事で充分埋合わせて見せる。今の歌声で此の元気で只今から各自持場に前進します。ご心配無い様と言われた事が再三ある。嬉しい事であり、自分の仕事がどんなに張り合いのあるものかと感激して居る。

戦いは長期を覚悟せねばならぬ。各全工場員諸氏の歌唱中のあの元気な顔、顔を思い浮かべた時、楽壇の諸氏に声を大にして呼びかけ度い。死力を尽くして職域の奉公を、職場へ農村へ漁村へ鉱山へ増産戦士のために捧げて戴き度いと、お願い申上げる次第である。